

「ハア、宜しおます。おちよはでは具合が悪うおます依つてに妾わたいが行て來ますわ。おちよやん。二階の奥の間チヨツとあんじようして、おざぶ一疊で宜しいで、煙草盆と……。ほんならチヨツとお頼申します。」

「ナア源やん。あれ此處の姐貴か。」

「そうや。」

「とうない別嬪やなア。あれ何者や。」

「元、出てたんや。」

「下水まじどからか。」

「狸やがな。イヤそうやない、北の新地から藝者に出てたんや。」

「フウン。宜い旦那が有るねナア。」

「旦那が有つて落籍おちづかすのんにチヨツと一函かかつたアるのや。」

「フウン、蜜柑箱か。」

「判らん奴やなア、千兩箱や。」

「エへ、あれ千兩か。あれ。」

「そうや。引かして貰ふて、此處の老舗を買ふて貰ふて、お茶屋をするなり、旦那がころつと死んだ

んや。今後家やね。」

「旦那が死んで後家か。そら淋しい事やるなア。お氣の毒に。」

「悔みを云ひないな。」

「俺わいもう小照をやめて、此處の内へ養子に來うかしらんで。」

「誰がお前見たいな者を養子にするもんか。そらさうと彼奴が來よつたら目が早い。下駄がたんと有つて感付きよつたらいかん。オイ喜イ公。下駄なまを納しとき。」

「そんな事云はれんかて、チャンと納したアる。」

「甚まい、お前に似合はぬ氣が利いたなア。」

「そらもう。」

「しかし何處へ納したんや。」

「下駄箱へ。」

「初めて來て、下駄箱が宜う判つたなア。」

「そら知つてるがな。此の網戸の下駄箱や。」

「阿呆、そら水屋やがな。水屋へ下駄を入れる奴があるか。出しとき。此處の姐貴、いたつて潔癖かんじょう性や。出しときんか。」